

年齢を表す名詞語彙の変遷

山口 堯 二

〔抄録〕

年齢を表す名詞には古来「とし」と「よはひ」がある。両語の複合語「としよばひ」からは「としうばひ」「としばひ」「としばへ」なども生じた。年齢の捉え方に、共起する語の違いを含めて、定数年齢・概数年齢・年齢階層・特定年齢階層を区別して、年齢を表す名詞の通時態を一望すれば、古代語の「とし」はまず定数年齢・概数年齢の表示に優れたが、年齢階層の表示に長じた「よ

はひ」の力を吸収しつつ、年齢を表す名詞の代表格に成長する様子が見え始める。室町期ごろから、「とし」は複合語の前項としても特に造語力を発揮し、従来漢語にしかなかった、一語で特定年齢階層を表す和語の語構成にも寄与している。

キーワード 「とし」、「よはひ」、「としばひ」、「としごろ」、「年配」

はじめに

広義の年齢には、「とし」などの普通名詞が担う概念的な語義としての年齢もあれば、「七十歳」のように数詞だけで表示できる年齢数もある。また、形容詞や動詞にも、「若し▽若い」「老ゆ▽老いる」のように年齢のありようを表せる語がある。それらの中で、本稿は年齢を表す普通名詞のみを対象とし、それと共起する語の違いも含めて、

年齢の捉え方を後述する数タイプに区分し、その捉え方の違いとからめて、普通名詞の通時的な推移の方向を見定めることを目的とする。

年齢を表す普通名詞には、古くから「とし」と「よはひ」がある。両語からは「とし」を前項として複合語「としよはひ」「としよばひ」も構成された。その仲間らしい語には、室町期に現れる「としうばひ（としうばい）」のように、従来その語形の出所が明らかにされていない語もある。広義の漢語（字音語）にも、「年配」のようにそ

の成立に見方の分かれているものがある。それらを含めて、語源や語の形成に関する従来の疑問点にも、多少の光をあてたいと思う。

普通名詞による年齢の捉え方には、年齢数と共起して示される暦年齢のありようと、他の用言と共起して示される階層的なありようがまず大別できる。暦年齢のありようには、さらに「年は、六十三歳」などのような定数の年齢数を表す数詞と共起するありようと、「十七八」「二十歳前後」「三十くらい」「四十恰好」「五十あまり」「六十近い」などのように端数を特定しない概数的な年齢数の言い方と共起するありようが区別できる。前者の捉え方を定数年齢、後者の捉え方を概数年齢と呼び分ける。年齢の階層的な捉え方にも、「年いまだ幼く」「年たけ齡傾きて」などと、他の動詞・形容詞などと共起して、年齢の多少・異同・範囲・変化・諸能力との関係、などによって階層的に年齢を表すものと、「中年」「としざかり」のように一語で特定の年齢階層を表すものがさらに区別できる。そこで、前者の捉え方を年齢階層、後者の捉え方を特定年齢階層と呼び分ける。

この定数年齢・概数年齢・年齢階層・特定年齢階層という、年齢の捉え方の区分は、年齢を表す名詞語彙の通時態を概観するための必要性を考えて、あらかじめ筆者が用意する最小限の物差しである。

「とし」と「よはひ」と「はらひ」と「はらひひ」と「はらひひひ」と

「とし」と「よはひ」は、上代から年齢を表すことのできる最も基本的な普通名詞であった。「とし」には、年に一度収穫される穀物、特に稻（また、その稔り）を表すこともあり、これが地球の公転に根

ざす時間の単位、暦年の意の出所と見られる。しかし、稻などの意の用例は上代に限られ、一般には早く忘れられた。暦に基づく暦年齢の意は、暦年の意から転じたものと見てよい。「とし」は、その暦年齢のありようを表せることから、さらに年齢階層の把握にも用途を広げた。一方、「よはひ」は、老少不定といわれるごとく、個人差が多く、予測しがたいものである寿命とその結果としての生存期間・人生の意をその中核とし、それらとの関係で年齢階層や暦年齢の把握にも用いられた。その点における「とし」との類義性と、微妙な分担範囲の差から、少なくとも中古以降、「としのよはひ」「としよはひ」などの形で「とし」と重ねて用いる言い方も生じ、複合語としては「としよはひ」の形も現れた。中世には「よはひ」の中核にあった寿命、生存期間・人生などの意は、しだいに漢語「寿命」、「生涯」「一生」「一期」などに交替していく。それにつれて、和語の「よはひ」はしだいに文章語となり、古風な言い方になっていった。その分、年齢の表示性に関して「とし」のほうが「としよはひ」などの形で「よはひ」の力も吸収していったと見てよさそうである。

まず、「とし」の用法から具体例を取り上げていく。例(1)は上代に偏る穀物（稻）の意の一例、例(2)は現代日本語まで変わりのない暦年の意の一例である。

(1) 我が欲りし雨は降り来ぬかくしあらば言挙げせずともしへ登
思は栄えむ
(万葉・十八・四一二四)

(2) あらたまの年へ等之の五年しきたへの手枕まかず
(万葉・十八・四一三)

次に、年齢を表す「とし」の例を、(3)定数年齢、(4)概数年齢、(5)年齢階層の表示の別に、それぞれ一斑を示そう。

(3)此の大帶日子天皇の御年、壹佰參拾漆歲。^① (古事記・中)

・御としも六十三にぞなり給ふ。 (源氏・遷標)

・仁平三年正月十五日、歳五十八にてうせにき。

(寛一本平家・一・鱧)

(4)年十有余の頃に、朝廷に力人ありと聞きて、試みむとおもひ、

(靈異記・上・三)

・殿上童に使ひたまひける、年十さいばかりなる、

(宇津保・藤原の君)

・年四十余斗なる男の、かつらひげなるが、(宇治拾遺・一三二)

(5)桜の花のもとにて、年のおいぬることをなげきてよめる

(古今・春上・詞書)

・合はせて七ところ、とし十三さいより下なり。

(宇津保・藤原の君)

・御としのほどよりは、おとなびうつくしき御さまにて、

(源氏・賢木)

・年たかうなりては、あつさをわびて、いとまを申て、

(宇治拾遺・序)

・よい年をして、螺まはし、扇引、なんこよびて、

(浮世草子・好色一代男・五・四)

「とし」には定数年齢の例が上代から多く、概数年齢を表す例も

『靈異記』などにあるが、年齢階層を表す例は中古以降にしか拾えな

かった。後述する「よはひ」の時代別の分布がむしろその逆になっているのに照らせば、この時代差には偶然とは言えないものがある。

次に、「よはひ」について述べる。「よはひ」は、本来次のように寿命の意や、その結果としての生存期間・人生の意を中核として用いられた。

(6)いかでか、そこにもこゝにも、万歳のいのち・よはひもがな、と

こそ思へ。 (宇津保・内侍のみ)

・のこりのよはひ少なくとも、一すぢに頼み給はば仕うまつらむ。

(落窪・二)

・かかるよはひのするに、若く盛りなる子に後れたてまつりて、

(源氏・葵)

・花も心ありければ、二十日の齡をたもちけり。

(寛一本平家・一・吾身栄花)

「よはひ」による年齢の表示法には、時代によつて差がめだつ。年齢階層を表す例が最も早く上代からあるが、概数年齢・定数年齢を表す例が現れるのは、院政期ごろである。そこで、年齢を表す「よはひ」の例は、その出現時期に照らし、「とし」の場合とは逆に、(7)年齢階層、(8)概数年齢、(9)定数年齢の順にその一斑を示す。

(7) 仁 孝 遠く聆えて、齒且長りたまへり。

(仁徳即位前紀・訓)

・未だ丁なる齡へ与ハヒを尽くさずして死に、

(靈異記・下・十六)

・としふればよはひはおいぬしかはあれど花をし見れば物思ひもな

し（古今・春上）

・ただ過ぎに過ぐるもの 帆かけたる舟。人のよはひ。

（枕・ただ過ぎに過ぐるもの）

・「静かに思ひて嗟くに堪へたり」とうち誦じたまふ。五十八を十とり棄てたる御よはひなれど、末になりたる心地したまひて、

（源氏・柏木）

・我子の小次郎がよはひ程にて容顔まことに美麗也ければ、

（覚一本平家・九・敦盛最期）

(8)而ルニ、惟高齡七十二余テ、鬢髮ヲ剃テ出家入道シテ

（今昔・十七・二十三）

・下女へ齡三四十の者、並びに少童へ十四五の者等、

（吾妻鏡・治承五・一・二二）

・よはひ廿ばかりなる女房の、色しろうきよげにて、まことにゆうにうつくしきが、

（覚一本平家・十・千手前）

(9)沙弥、齡七十二満テ、独り、深キ山ニ入テ、（今昔・十七・八）

・齡すでに八句にたけて、行歩にかないがたう候。

（覚一本平家・四・大衆揃）

・御齡已ニ二八ニシテ、金鶏障ノ下ニ冊レテ、（太平記・一）
上代の文献には、日本書紀の訓にしか「よはひ」の語例はない。そのわずかな例が右の(7)の第一例であり、年齢階層を表すものである。

(7)の第五例、源氏物語の柏木巻の例は、同作品中に年齢を表すと認められる「よはひ」が五八例ある中で、数詞の共起した唯一の例であり、白楽天の詩句（白氏文集・五八・自嘲）を踏まえて、楽天との年齢差

を言う。計算上、源氏の定数年齢もわかる表現ながら、年齢の異同が焦点になっていくから、これも年齢階層の例になる。後に続く語句「末になりたる心地」の「末」は、「よはひの末」の意だから、この例の「よはひ」には人生の意もくみ取れる点がある。

なお、(9)の定数年齢を表す例には、文章語的な言い方がめだち、たんに定数の年齢数を表すだけにはとどまらない言いまわしがなお注意される。

「とし」には、定数年齢・概数年齢を表す例が上代からあったが、年齢階層を表す例は中古以降にしか得られなかった。それに対して、「よはひ」には逆に年齢階層を表す例が早く上代からあったが、概数年齢・定数年齢を表す例の出現はかなり遅れ、院政期以降のようであった。その時代的な分布には、もともと「とし」のほうが定数年齢の表示に優れ、「よはひ」は年齢階層の表示に長じていた傾向がうかがえる。同じ年齢を表す場合でも、「とし」によるほうが、その表現価値はそれだけ現実的・確定的であり、「よはひ」はむしろ可能的・推測的であっただろう。「とし」のそういう特長は、その年齢の意が暦年の意に由来することと連関し、「よはひ」のそういう特長は、その年齢の意が寿命や人生の意から派生したものと連関するはずである。しかし、中古以降「とし」も年齢階層を表すようになり、また院政期以降は、「よはひ」も概数年齢を中心に暦年齢の表示も担うようになって、両語の年齢の捉え方は接近してきた。次に取り上げる両語の複合語「としよはひ」「としよばひ」以下の出現も、また別のかたちで同様の接近をうかがわせる現象である。

二、複合語「としよはひ」「よしよはひ」

「とし」と「よはひ」は、本来かなりの相違点をもつ語であったが、中古から院政期にかけて次第に類義性を高めた。そのような共通点と相違点から、より現実的な表現価値をもつ「とし」を「よはひ」に冠して、単独の「よはひ」よりもその表現性を現実化する言い方も、中古以降生じた。その一つは助詞「の」を介する連語「としのよはひ」であり、一つは「とし」を前項として「よはひ」と複合させる「としよはひ」である。どちらも「とし」や「よはひ」の単独使用に比べて、より明示的に概数年齢や年齢階層を表す言い方になったようである。

「としのよはひ」の確かな例は中古から拾える（後述の(24)・(25)の漢字表記の例にもその可能性がある）が、文学作品には中世室町期ごろから、特にその多用がめだってくる。その例の多くは、概数年齢・年齢階層の表示に用いられており、時代が下るほど概数年齢に用いた例が多くなっている。次にそれらの例を併せて示す。

(10) まして若き人のかたちにつけて、としのよはひに、つゝましきこ

となきが、

(紫式部日記)

・若我父モ今迄存命給ハバ、彼年齢程ナルベシ。

(三国伝記・七・十八)

・御としのよはひ十五六ほどに見えさせ給ふ。

(御伽草子・鉢かづき)

・かの人を見るに、としのよはひ十六七ばかりなる若衆也。

(仮名草子・竹斎・上)

・年の齡、三十ばかりなる女子と、十ばかりなる男の童の声して、

(読本・椿説弓張月・後・二三回)

一方、複合語「としよはひ」も、その例は中古から拾える。というより、中古には「としのよはひ」より「としよはひ」の例のほうが入手しやすい。それには次のような例がある。いずれも年齢階層の表示に用いられている。

(11) かくて、その男ども、としよはひ、顔かたち、人の程、ただ同じ

ばかりなむありける。

(大和・一四七)

・今はまして難かるべきとしよはひになりゆくを、いかでいやしからざらむ人の女子一人取りて、後見もせむ

(蜻蛉・下・天禄三年二月)

・何ともなくて積もりはべるとしよはひにそへて、いにしへのことなん恋しかりけるを、

(源氏・行幸)

・この大納言は、いとわかきとしよはひには似ず、ありがたく、この方にもしづめて、

(夜の寝覚・二)

・としよはひ、位のきはも、またあさはかに軽々しうはおほゆれど、

(浜松中納言・四)

さて、複合語化した「としよはひ」は、やがてその四番目の音節「は」が濁音化し、中世にはトシヨバイと発音されることになる。「としよはひ」が現れた。

(12) 年齢 (天正十八年本節用集)

・おぬしもよひとしよはひして、そのやうな事を云か。

(虎明本狂言・老武者)

「としよばひ」の確かな例は多くないが、意味的には中古の「としよはひ」と同様、年齢階層の表示に用いられている。ちなみに、(12)の第二例の「よひとしよばひして」は、近世以降、年齢不相応をなじるのに多用される「よい年して」より一足早い例でもある。

三、「よ」から「しよ」への変遷

「よしよはひ」から「としよばひ」への濁音化と前後して、室町期には「としよばひ」の第二・三音節シヨ<ショの拗音化等により、「としばひ」「としうばひ」「としばへ」などのさらなる転化形が生じたと考えられる。以下に述べるその転化についての見方は、現行辞書類の所説とは異なる私見であるが、辞書の所説を含めた研究史の紹介はあとまわしにして、ここではまず私見による転化の順序と、その結果生じた語形の例を順次取り上げよう。

まず「としよばひ」の第二・三音節シヨの部分には、「よばひ」の語源意識の希薄化に伴い、シの母音*i*とヨの子音*j*が一体化して短縮・拗音化し、トシヨバイとも発音されたようである。仮名書きでは拗音も同じ大きさの仮名で表記された時代だから、仮名書きの例はトシヨバイと読まれたか、トシヨバイと読まれたかの区別はつかない。しかし、次に取り上げる例(13)に、トシヨウバイという形に、拗長音化したと見られるローマ字表記の例があるから、その前段階として、シヨという拗音化を想定するのが自然であろう。その拗音化したシヨが、一方ではそれがもとの拍数を保とうとして、シヨウと拗長音化したのが、次の辞書にあるトシヨウバイだと考える。

(13) vonaji toxōbai naru mono. (羅葡日対訳辞書・一六一ページ、contemporaneusの項)⁽²⁾

しかし、トシヨバイやトシヨウバイと発音されるようになっては、「とし」に対する語形上の同定性が保ちにくくなる結果、また一方では、それらの第一・二音節はトシであるべきだという規範意識が働いて、そのトシヨをトシに改めようとする動きも生じたと考えられる。そうしてトシヨバイからはトシバイが生じ、トシヨウバイからはおそらくより類音のトシユウバイを経てトシウバイが生じたのである。そのトシバイと発音された「としばひ」、および、トシウバイと発音された「としうばひ」には、次のような例がある。(14)は「としばひ」の例(ただし、その第三例には「としうばひ」のローマ字表記の例も含まれている)、(15)は「としうばひ」の例である。

(14) 方郷^{かたき}術^{じゆ}(入レ学) マツサカリ稽古サシマウズ年^{とし}バ^いゾ。

(漢書抄・杜周伝・一69ウ)

・ちご・わらんべ面。年ばい同じ比なれども、変り候所は、ちごは気高き顔ばせにて、……面の懸けやうの事。其謡に作りし人のとしばい、幾つものとしごろを作りしこと、よく尋て面を似相て懸けべし。(八帖花伝書・六)

・Toxibai, toxubai. トシバイ、または、トシウバイ。……年齢の多き加減。Toxibai がよい。……まだ三十歳から四十歳余までのような良い年齢である。Toxibai がすぎた。……もはや良い年齢が過ぎた、すなわち、老人である。Toxibai がわかい人。まだ若い人。(邦訳日葡辞書)

・わたしが舅の親父様、丁度お前のとしばいで、恰好も其の儘、外へする奉公とはさらさらもつて思はれず。

(浄瑠璃・冥途の飛脚・下)

・色の恋のとは似たか寄つたの年ばい。おれは今年三十八。そなたは十四。おとなげないと行き過ぎた。(浄瑠璃・桂川連理柵・上)

(5)以正ト云フハ、男女ノ婚二年ウバイガアル。其ヲ時ヲ過サヌガ正ゾ。正ハ年齢ゾ。

(毛詩抄・一28ウ)

・汝ガ父ノ子由モ汝ガ年ゴロハマツ只汝ガ如ニ長カリシゾ。汝父子由ハ汝ガ年ウバイデハ筆(頭一落三千字)シテアリシゾ。

(四河入海・二二・三53ウ)

しかし、こうして「とし」との同定性を回復した、トシバイやトシウバイにおいても、「とし」と「よはひ」の複合語であつたという本来の語源は、いっそう不透明化したようである。「よはひ」との関係から、歴史的仮名遣いでは「ひ」にあたる語末の音節が、仮名書きではいづれも「い(イ)」で表記されているのも、それと無縁ではあるまい。

「としばへ」の語形は、次にあげるように近世になつてはじめて認められる。

(16)としばへは四十にあまれども、(断本・鹿の巻筆・五)

・同じ年ばへの子共近所に多けれ共、物にせぬ鼻垂娘共とは遊ばせ

ず(浮世草子・傾城禁短気・三・一)

・身材年庚、総て荘介・小文吾に、毫も違はず

(読本・南総里見八犬伝・八・七十九)

・未だ鉄漿かも含まれず、花桐様が若君を、お産みなされたお年ばへ。

(合巻・修紫田舎源氏・二)

一見、新しい造語のようにも見えるが、この「としばへ」はトシバイのバイを古語「延ふ」(下二段)の連用形に擬して理解しようとする、新たな語源の想定によつて生じた語形であろう。本来の語源が不透明化すると、その現存形態をいわば合理化しようとして、新たにそれらしい語源を模索させることがよくある。発音がトシバイと類音のトシバエがありながら、「としばえ」の表記よりも「としばへ」の表記がめだつこと、意義の共通するトシバイが室町期からあり、かつ、近世を通じて認められ、現在も諸方言に残るのに対して、トシバエの形は中世に認められず、近世の用例も限られていること、意義上、その時期に古語「延ふ」を復活させるほどの新たな造語の需要は考えにくいこと、などがその私見の理由になる。

先行研究の紹介をあとまわしにしたが、「としよばひ」からの転化と見てきた語形同士の関係も、現行の辞書類では、次のように「としばひ」よりも「としばへ」がより基本的な語形と見なされている。

としばい【年延】(名)(としばえ(年延)の変化した語)(日本

国語大辞典)

としばひ【年延・年配・年輩】「としばへ」の転。のちには「ねんばい」とも読む。(角川古語大辞典)

ところが、室町期に例のある例(5)などの「としうばひ(としうばい)」については、次のようにその語義の説明を「としばへ」「としばひ(としばい)」のいずれかに送るのみで、語形の出所については何

の説明もない（『日本国語大辞典』には、「としばひ（としばい）」は立項されてもいない）。

としばい【年うばい】名「としばへ」に同じ。（角川古語大辞典）

としばい【年うばい】↓としばい（時代別国語大辞典室町時代編）

「としばひ（としばい）」より「としばへ」の正当性を優先させる見方は、このように「としばひ（としばい）」の存在を無視なし軽視する立場でもあると言わざるを得ない。

ちなみに、近世の辞書『倭訓栞』後編には「としばい」の項があり、「俗語也。行年をいへば年齢の排行なるべし」とあって、後にも触れる暦年齢の「行年」を説明に用いているが、この辞書には、「としばへ」についての言及はない。

「としばひ」以下「としばへ」に至る諸語形の相互関係、特に「としばひ」「としばひ」「としばへ」のそれについて述べた本稿の見解は、現行辞書類のそれと大きく異なるものであった。しかし、先行研究の中には私見にかなり近いものも見出される。山田俊雄「漢語研究上の一問題——仮名書きの場合の同定 (Identification) について、特に「年はい」について——」に見える所説がそれである³⁴。山田氏の見解は次のような形でまとめられている。

さて、「年ばい」が「年延え」「年延へ」の転とする、かなり一般的な考へ方の当否に一言触れるならば、筆者としては、さほど単純ではあるまいと考へる。

『運歩色葉集』に「年齢^{としよばい}」があり、狂言に「としよばい」が見出された事実に対応して、キリシタン資料には「としばい」となるんで「としばい」「としやうばい」の形が存する。（中略）この二形は、「としよわい」「としよばい」に親近の形といへないだらうか。古く「としよはひ」の例は『源氏物語』や『蜻蛉日記』に見えるから、「としよはひ」は、由来が遠い。

しかし、山田氏の見解は、「としばい」が「としよはひ」に由来する可能性を、かなり控えめに示唆するにとどまった。右の引用部に続く論文の「むすび」にも、氏は「その語の沿革を何一つ確かな形では云ひ得なかつた」が、「主張せんとするところは、実は、他に存した。漢字仮名交じりの語表記の不安定・不確定といふ点である」と結ばれている。

以上に取り上げた「としばひ」「としばい」「としばへ」の例は、一部、概数年齢の表示に用いられた例を含む程度で、多くは年齢階層の表示に用いられていた。そういう年齢の捉え方においても、これらは中古の複合語「としよはひ」につながるものである。その転化の過程で「よはひ」から転じた後項の語源は忘れ去られたが、前項はその転化の過程に生じた発音の拗音化・拗長音化にも抗して、「とし」との同定性が回復されたから、複合語「としよはひ」以下の転化形も、結果的にはあくまで「とし」を前項とする複合語ではあり続けたといえる。その意味で、これらの語も、年齢を表す名詞語彙の通時態において、「とし」をその代表格に仕立てていく動きの重要な一翼を担ったはずである。

四、漢語語彙と複合語「とし——」の増加

室町期以降、年齢を表す名詞には「とし」を前項に据えた新しい複合語の構成がかなりめだつようになる。次に示す、「としごろ（年頃）」、「としは（年端）」、「としかつかう（年恰好）」などもそれぞれであり、これらは年齢階層、または、概数年齢の表示に用いられた。

(17) その中に年ごろ四十二三ばかりなる僧の、

(御伽草子・三人法師・上)

・先其病人の様子年比彼これ承り、其上にて加持致さん

(浮世草子・新色五卷書・五・二)

・其歳齡は十八九、少し勇肌には見ゆれども、

(人情本・英対暖語・初・三)

(18) 今死んでは年はもいかぬ三人の子が流浪する。

(浄瑠璃・女殺油地獄・下)

・よしないおれ故いぢらしい。年端も行ぬ身の苦勞。

(浄瑠璃・桂川連理柵・上)

・年はもゆかぬ娘氣に親の手元をはなれつゝ、

(人情本・英対暖語・初・三)

(19) 此人の年かつかう、心だてはと問ひければ、

(浄瑠璃・百合若大臣野守鑑・四)

・三十か四十マア五十位の年恰好から呑むと大に葉だ。

(滑稽本・酩酊氣質・下)

・年恰好も三十七歳といへばさうも見え (谷崎潤一郎・春琴抄)

このうち、「としは（年端）」は、その用途が「年端も行かぬ」式の言い方に限られている。漢語「年齒」の訓読語と言われているが、それにしてもその用途があまりに限られている理由がはつきりせず、疑問の残るところである。

一方、漢語の年齢を表す語には、「しやうねん（生年）」、「ぎやうねん（行年）」、「きようねん（享年）」、「しゆんじう（春秋）」、「ねんし（年齒）」、「ねんれい（年齢）」などもある。時代的な広がりにはまだ立ち入る余裕はないが、まず「生年」「行年」「享年」「春秋」について、比較的早い例を少しあげておく。

(20) 去天平宝字八年、真備生年數滿三十七。

(続日本紀・宝龜元年十月三日)

・生年二十五にして天皇の請ひを受けまつりて(靈異記・上・序)

・志求極樂一人皆不許。生年十八入滅。(続本朝往生伝)

・足利太郎俊綱が子、又太郎忠綱、生年十七歳。

(覚一本平家・四・宮御最期)

(21) 予自少日念「弥陀仏」。行年四十以降、其志弥劇。

(日本往生極楽記)

・今年行年、五十五、羸痾荐二侵ス。(元亨釈書・十七)

・遂二行年七十一歳、八月八日ノ未ノ時ニ帰寂有リ。

(三国伝記・八・六)

(22) 元和元年乙卯……十七日、齋戒沐浴、安弥陀尊像於床頭、口誦仏名不断、右脇而寂。享年七十七。夏臘六十七。乃葬羅漢堂之後。

(貞安上人伝)

・嘉応二年四月下旬、為朝伊豆の大嶋において自害す。享年まやうらん三十三歳と見えたり。
 （読本・椿説弓張月・後・二二二回）

・性蓮院妙相日縁信女、父皓、母澀江氏、安永六年丁酉五月三日死、享年十九、俗名千代、臨終作歌曰「云々としてあるのは、
 （森鷗外・澀江抽斎・八）

(23) 天皇、崩于西宮寝殿。春秋五十三。

（続日本紀・宝亀元・八・四）

・春秋八十有余にして卒りき。

（靈異記・上・七）

・去一日太皇太后昌子内親王崩。于時春秋五十。

（権記・長保元・一二・五）

・土御門院……建久九年正月十一日受禪。三月三日即位。春秋四歳。
 （吾妻鏡・建仁三・九・一五）

これらはいずれも定数年齢を中心に、暦年齢の表示に用いられている。例(20)の第一例は、新日本古典文学大系では、「せいねん」と漢音によませている。例(22)の「享年」は相対的に新しい用語らしく、かつ、死亡時の年齢のみに用いられているのが、他と異なる。ちなみに、『南総里見八犬伝・第九輯下帙之下』のはしがきには、「享年」に「うけたるとし」とルビを付す例がある。例(23)「春秋」の第一例は、新日本古典文学大系本では「おほみとし」と訓読している。

定数年齢を中心に用いられた語には、このほか天皇や上皇の年齢、特に崩御時の年齢を表すのに用いられた「叡算」「宝算」などの敬語もある。また、僧の死没の年齢には、出家後の数えの年数「法臘（僧臘・夏臘なども）」に対して「世寿」「俗寿」などの言い方も用いら

れた。

それらの定数年齢中心に用いられた語に対して、「年齒」や「年齢」は、次に示すように基本的には年齢階層の表示に用いられている。「年齢」を定数年齢の表示に用いるのは、きわめて新しいことのようにだ。

(24) 因以此神器、欲讓皇太子、而年齒幼稚、未離深宮、

（続日本紀・靈龜元・九・一九）

・白壁王波諸王乃中尔年齒毛長奈利。

（日本紀略・前十二）

・是善官号白氏に同じく、年齒盧公に校べり。

（本朝文粹・九・南亞相山庄尚齒會詩序）

(25) 年齒已暮、暫欲養遊魂
 （三代実録・貞観一三・四・一四）

・年齢の程を思ふに、奥州の九郎か、早く御対面有る可し

（吾妻鏡・治承四・一〇・二二）

・又八年齡モタケテ兄デアラウゾ
 （史記抄・孝文本紀・七10ウ）

・かほどわかまへなからん年齢にもおはせぬものを

（折たく柴の記・上）

・年齢は三十二歳だというが、三、四歳若くみえた。

（吉村昭・休暇・一）

例(24)「年齒」の第一例は、新日本古典文学大系本には「よはひ」と訓読されている。その例に限らず、「年齒」「年齢」と表記された古い例には、「よはひ」、「としのよはひ」、「としよはひ」などと訓読された可能性も残りそうである。

「年配（ねんばい√ねんばい）」は近世後期から明治期にかけて現

れる字音語である。その成立には、すでに述べた「としばひ（としばい）」がかかわると見てよからう。「としばひ（としばい）」は、「としばひ」がトシヨバイトシバイと転じてできた語形と見たが、その「ばい」の語源が不透明化した結果、表記に「配」「倍」「輩」などの漢字が新たに求められ、それらの漢字で表記された「年配」「年倍」「年輩」などが、その「年」の字も音読されて「ねんばい」ねんばい」と読まれるに至ったのであろう。それらには、次のように概数年齢や年齢階層の表示に用いた例がある。特定年齢階層の表示に用いた例もあるが、それについてはその捉え方を表す他の語とまとめて、後に言及する。

(26) 九月より忠臣蔵のゆらの助は、年配にはちと不相応、いかゞあらんと思ひの外大出来なりし。
(中山文七一代狂言記)

・ 評に曰、年配かつこう義平女房に甚よく取合たり。

(古今いろは評林・下)

・ 一人は年配二十二、三の男、……奥座舖の長手の火鉢の傍に年配四十恰好の年増、
(二葉亭四迷・浮雲・一・一〜四)

・ 渠は……年配四十五六、
(泉鏡花・高野聖・一)

(27) おちよはお千代らしい年倍の役者でなければ、移らぬといつて

(滑稽本・浮世床・初・下)

(28) おれ共の様な年輩になると、人が此左右をツイ忘れ易いが

(颯風新話・上・三)

前掲山田論文には、「年ばい」もしくは「年ばい」を、漢語「年輩」にもとづく後出のものとせんとする」とある。『日本国語大辞

典」が「ねんばい【年輩・年配】」の見出しを掲げ、中国側の「年輩」の例も引くのは、その見方によるのだろうか。しかし、日本における「年輩」の用例としては、安政四年刊の翻訳書の一節である(28)の例が早いものとされている。「ねんばい・ねんばい」が、漢語「年輩」にもとづくというには、日本における「年輩」の例の出現が新し過ぎはしないか。それに、(28)の例は『海軍史料叢書・六』所収本の表記によれば、「輩」の字にのみ「はい」とルビを振っており、「ねんばい・ねんばい」と読ませるためにしては、ルビの振り方が変わっている。そう思えば、「としばひ」と読ませるつもりだった可能性も残りそうである。すでに成立した和製漢語「ねんばい」に対する用字の一つに、意図的であれ結果的であれ、中国側に例のある表記も採用されたと見るのが自然ではないだろうか。なお、『角川古語大辞典』には「ねんばい」の項がなく、代わりに「ねんばい【年配】」があり、「としばい」とも」とする。

ちなみに、年齢階層の捉え方には、諸能力との関係によるものもあった。近世には、「とし」を前項として、そういう観点から実年齢との一致・不一致に言及したり、他人の年齢を穿鑿したりする意の複合語も現れている。おもに中年以上の人を相手に、お若いですなえなどという類の発言をさす「としさんだん(年讀歎)」、他人の年齢をあこれ穿鑿する「としせんさく(年穿鑿)」、年齢にふさわしくない行為に対し、多く否定と共起して用いられる「としがひ(年甲斐)」、逆に年齢にふさわしいさまを表す「としさうおう(年相應)」がそれぞれである。これらの場合、複合語としての意味はかえって年齢を表す名詞の

類からはみだすことになるが、年齢を表す「とし」の造語力を示す点では、併せて注意してよいと思う。

(29) 旦那のあつまりて茶うけなどある座鋪に、年さんだむのあるは常のならひ也。
（漸本・醒睡笑・一・鈍副子）

(30) 仮初にもかゝる一座にて年せんさくは用捨あるべし。

（浮世草子・好色一代男・二・一）

(31) ホンニマア私としたことが、歳がひもなく泣いたとて、

（人情本・春色梅児誉美・四・二十一）

(32) 子供は年相応の小さい松明を態と重さうに踉蹌けながら担ぎ廻つた。
（志賀直哉・暗夜行路・三・十七）

さて、漢語には、「幼年」「少年」「若年」「中年」「壮年」「盛年」「老年」「老年」「年少」「年長」など、一語で特定年齢階層を明示するものが多い。その早いものは上代から現れ、遅いものでも近世にはその初例が認められる（近年の使用がめだつ「高齢」「老齡」などもその仲間の字音語であるが、これらは和製であろう）。

和語でそれらに相当する意味を表そうとすれば、普通、「年若し」「年老ゆ」などの連語によらざるを得なかつた。しかし、近世になつて、和語にもそれに似た複合語が少し現れた。次に示す「としわか」「としざかり」などがそれである。

(33) 今年廿六なるを、三十一になりますと、……五つ隠されし、世上のならひにて、年若に云を悦びしに、さりとは不思議晴ざりし。

（浮世草子・本朝二十不孝・一・一）

・おとしわかじやが、ありがたい殿様じや。

（黄表紙・孔子縞于時藍染）

(34) としざかりに向かふ芸能の、生ずる所なり。
（風姿花伝・一）

一語で特定年齢階層を表すこれらの周辺には、中世からある「としおい（年老）」「よしより（年寄）」、近世以降の「としま（年増）」など、直ちにその階層の人を表す働きの強いものもある。年齢自体を表す名詞の類からは少しはずれるが、「とし」にめだつてくる造語力を示す点では、これらにも注意してよい。

(35) Toxiuoi. トシライ 老人。（邦訳日葡辞書）

(36) 時ノ諸侯王ハ皆年ヨリガ多ク天子ハマダ少ウライリアルホドニ

（史記抄・魏其武安侯列伝・一四4才）

(37) 「お内儀はいくつじや」「五十八」「是は大きなとしまじや」

（漸本・軽口御前男・四）

「としま（年増）」からは、さらに「ちゆうどしま（中年増）」「おほどしま（大年増）」という言い方も生じて、使い分けられた。

和語にはまた別に、もつと観念的暗示的に特定年齢階層を一語で表す語も、近世初期ごろから現れた。「としごろ」「としばひ（としばい）」「としばへ」「としがまへ（年構へ）」「ねんばい（年配・年輩）」による、次のような用法がそれである。このうち「としがまへ」以外は年齢階層などを表示する他の年齢の捉え方を示す用法が知られるので、それから派生したものであることがわかる。

(38) わかき物共、寄合ひて、中にも年ごろの男申さるゝは、此ごろは一えん暇なきゆへ、かのあそびもならず、

（漸本・昨日は今日の物語・上・二三）

・彼の子がもはや年頃なら、さぞや喜び候はんが、最善も申す通り、まだ其の心幼さに、直にお請けもない難しト

(台巻・修紫田舎源氏・六)

・広子は年ごろの妹に恋愛問題の起つたことは格別意外にも思はなかつた。

(芥川龍之介・春・一)

(39)としばいなる仁体なり。

(浄瑠璃・心中重井筒・上)

・さきにすゝみたる年ばいの男、上下の髪をたゞし、

(黄表紙・金々先生栄花夢)

・とりなし難い浮気では、かへつて年倍の成清へ恥をあたゆると、

同前じやが、

(人情本・春色梅児誉美・四・二十)

(40)年ばへの女糸屋の重手代(雑俳・へらず口)

(41)台所に年がまへなる男が、白き絹縮に、紅裏付て、

(浮世草子・好色一代男・五・七)

・あるとき内助に、あはせの事ありて、年がまへなる女房を持しに、

(浮世草子・西鶴諸国ばなし・四・七)

(42)彼に一番親しい或年輩の骨董屋は先妻の娘に通じてゐた。

(芥川龍之介・玄鶴山房・五)

・冬になると年配の女が雪中の絵の軸物を眺めている様子を描いた。

(秦恒平・閨秀・一)

これらはいずれも特定年齢階層を観念的暗示的に表す言い方なので、漢語「盛年」や和語「としざかり」のような特定階層の明示性には乏しい。したがって、使い方によってその階層の具体的な捉え方は揺れる可能性があるけれども、概していえば、世情に通じた中年あたりを

さすことが多い。ただ、「としごろ」は、第二・三例のように(おも

に女性の)結婚に関する適齢にも使われている。年齢階層を表す言い

方には、より早く「よひとしよばひ」(12の第二例)といった連語で、

やや観念的に特定階層を限定する言い方が先行しているから、そうい

う言い方がこれらの語、ないし用法を先導したとも考えられる。

なお、近年は、単純語の「とし」にも、次のように同様の含みで特

定年齢階層を暗示的に表す言い方が見られるようになった。

(43)「御主人といふかた、もうお年でせう。」(井伏鱒二・本日休診)

・うちのかおあちゃんはどうなう云つても齡だから、

(幸田文・流れる)

特定年齢階層の捉え方には、このほか、もっぱら他者の年齢との相

対関係において特定される階層を表す語もある。他の年齢に比べてそ

の上・下を示す「としかさ(年嵩)」「としまさり(年増)」「としまし

(年増)」「としおとり(年劣)」「としうへ(年上)」「としした

(年下)」がそれである。「としまさり」「としまし」「としおとり」

は室町期に、「としかさ」は近世初期に、「としうへ」「としした」は

近世後期に、それぞれ初例が知られる。

(44)Toxicasa. 最も年とつてゐるもの、または、年上のもの。

Toxicasano fito. (邦訳日葡辞書)

・年かさなやつが起ても朝辰(武玉川・一三)

(45)身ヨリ年マサリデサフ。(史記抄・項羽本紀・五16才)

(46)其中デ我ヨリ年ヲトリヲバ従弟ト云、我ヨリ年マシヲ従兄ト云ゾ。

(三体詩素隠抄・四35ウ)

・楽屋にて云合の作法、……脇とは年まし、上手次第、互の時宜あるべし。
(わらんべ草・一)

(47) 兄さんへこのことばは、せけんのむすめごどもがすこしとうへのおとこをうやまつていふことばにてへ

(人情本・英対暖語・二・八)

(48) 年下の子をなかせたり、きげんのよい中を引きたいする。

(滑稽本・浮世風呂・二・上)

なお、年齢の相対的な上下をいう語には、漢語「年長」「年少」もあるが、それらのその意による使用は、概して新しいようである。

年齢を表す名詞には、室町期以降、「とし」を前項とする複合語がいろいろ生じてきたことを、漢語のありようやその動きにもからめて述べた。中でも、年齢の捉え方に関しては、概数年齢や年齢階層の表示に用いられた「としごろ」などから、一語で観念的暗示的に特定年齢階層を表すものが生じたこと、また、もっぱら上下の相対的な特定年齢階層を表す語が形成されたことなどが注意されることである。

近現代語の「とし」は、それらの年齢の捉え方にも進出し、年齢を表す名詞語彙の代表格の地位をいつそう確かなものにしていく。その通時態にはまさに「とし」の功が著しいといえよう。

〔注〕

(1) この数詞は、諸注釈書にいずれも訓読されているが、その訓法は、注釈書によってまちまちである。

(2) 後述の山田俊雄論文には、この例を「tokōhai」とあるように読んでいる。オ段長音の開合を示す記号が半ば近く欠損しているため、開音の記号に見えたのだろうか、筆者には合音の記号のように見えるので、それに従った。ただし、もし開音の記号になっているとすれば、その表記は開合の誤りとみななければならない。

(3) ただし、用例の清濁表記は、例(14)では「冥途の飛脚」の例以外、筆者の判断による。統抄物資料集成の「漢書抄」、日本思想大系『古代中世芸術論集』所収の「八帖花伝書」の例は、それぞれ「年ハイ」、「年はい」「としはい」と、いずれも濁点がない。なお、統抄物資料集成の「索引篇」には、その「年ハイ」を「ネンパイ(年輩)」の見出しであげ、「八帖花伝書」の校注者は、「年はい」などに「年配」の漢字を当てている。例(15)の毛詩抄・四河入海の例も、抄物資料集成では、いずれも「バ」に濁点はない。なお、その「毛詩抄索引」には、「トシウバイ(年奪)」の見出しでその例をあげている。

(4) 『成城国文学論集』一〇(昭和五三・二)。

(5) 鈴木勝忠『雑俳語辞典』(昭和四三年、東京堂出版)。

(6) この「齡」字にルビはないが、同作品には「とし」というルビ付きの「齡」字が多い。

(やまぐち ぎょうじ) 日本語日本文学料

二〇〇二年十月十六日受理